

高野物語

昭和改行版
外五

特260
687

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10m 1 2 3 4 5

始



高野物狂

(梗概) 常陸の國平松氏の幼主春満は、去年秋父を失ひ一より世を果敢なみ、遁世一て行方一らずなりたり、家臣高師の四郎幼主をも失ひたる悲一又の爲め遂に物狂ひとなり、主君の殘一給へる文を抱きて放下の姿のまゝ紀伊國高野山に到りぬ。折から此山に入りて出家せる春満は其師僧と共に三鉢の松に出でてこあり一が、偶この物狂に出會ひ、師僧と物狂の間に様々面白き問答ある間に、其の狂人こそ旧臣高師の四郎なる事す知り從互に其の邂逅を喜び、尚ほ高師の四郎もここにて出家一主君諸共佛に仕ふる身となりぬ。



シテ
高師四郎
後シテ
前同
所 前常陸國筑波里
子方 平松春滿
ワキ 高野山の僧
季 後紀州高野山
春

高野物語
木氣軒もべき乃あや
そぞてん 羽毛是ハ常陸國の住人平松
殿の臣内よ仕へず、タカシカ石比四席とや共
にくい、ねど來まりゆ、平松處ハ去年此
秋のはすを、成程ひてゆ、實にまよ瀧處

とよりて活子息のひをもを、^{マト} 素飯りや
そひ又萬里^{アシカニ}迎^{スル}を観る寺と申所よ、
平松庵の碑位牌を、達^{シテ}ゆてひ^{マト}。今
日は命爵にそひ程よ、^{マト} まつよ系り焼
香せをやと存^リ^{ナシ}。^上 み冠や首を冥山
名法也。今左西方名流陀^タ、婆^ハ示祝觀

世音、三世利益同一軀、實^シあ難^シき。嘗願
をも。^{日上} 無眼承元^{アシカニ}生^ス惠^キ。^ハ ちりひ
尊^シき目比^シ射^シの墨^シ、^{マウ} あに世比^シ坐^ス、^ハ 三^シ後^ニ
世^シけ^シ、^シ 漸^ムみ^シ。^ト 何^シ、^シ 一^シて
油^シ、^シ 背^シへ^シと^シ、^シ おぬ^シを
見^シうするに^シ。 ^{サシ} 上^シ ま更^シう^シき人^シを

更を離さず余の其法より事、闇
前此灯火阿水乃渡り舟船を得てあ
ひ地く我と是もんのせよ今を
捨てば焼カクラよ又三途をゆんす欲
もむれゆりあは生ふけ身を浮めず、
前の時たりおりんさん抱るよ一子生

おもれバ七世の父母成佛もあま六世
身を捨てゆふか別きテ父母乃
坐せ、より生の熟を助んとされ
の大苦是もあうとひ切つて身を出
ゆれば少くたま又母よあき
まな只おとを丁寧ひきよ父も

海を離さるふりすかすて別事
乳あさを生れぬよ二度わたりる
乞地ハタケのあす丁我惜りゆへかな
尋ねあよ三年の内よ必く
身の行はれをも知せやさん。五と見
名残う情うゆへ墨と衣思ひとてむ

さだうせを出る名残の神を濡りりと
遊ハシメテされども云は葉乃、翁の老を先
ちて身の成累カツリあらんカツア恨め
比事ハシメテ假世ハシメテを控候ふとも云
せばたのまあく何國とも拂候よな
どや併ひ候ぬぞ、今立敷行花ハシメテ也輕む

本居宣長著「水比古」

東の繁縝をもつてゆ。又今日ハ三姑
北極す。徳也、慰めゆ。さもやとやひ。
先づく。坐す。一セイサシ。上肩墨アシメモ。事畢
はまよづけ。ノ、廻武アラム。まよ古アラコ。
捨衣。君をあれぬ忠勤の心。君を小海

ヨリ、厚れぞり。我も、ま君の墨跡湯
うの空成四帖を、易めやわゆとをして乃
隣奥紙よすゑどる文、そ君の形見あれ
あくまであるの、即ち也、乃、呼子鷺毛
カリ^上さそひき、花乃ぢ湯を易つ。
ねじくるふうねして形見よとせるば文

を、あく成物と、人やうん^{キヤ}豹もよ
ひ紀の國^{アシテ}名^{ハシマ}サ^チ、^{アシテ}是^{ハシマ}や^{アシテ}
體の山^{アシテ}、^{アシテ}おみ比本^{アシテ}、^{アシテ}行^{アシテ}、^{アシテ}宴^{アシテ}も
はくをせ山^{アシテ}、^{アシテ}やらんと、^{アシテ}亦^{アシテ}を、^{アシテ}風^{アシテ}の、^{アシテ}むじ^{アシテ}
麻^{アシテ}、^{アシテ}き^{アシテ}が、^{アシテ}ふも^{アシテ}物^{アシテ}、^{アシテ}か^{アシテ}を、^{アシテ}風^{アシテ}の、^{アシテ}ト^{アシテ}
山^{アシテ}ね^{アシテ}、^{アシテ}ね^{アシテ}を、^{アシテ}しき^{アシテ}や、^{アシテ}程^{アシテ}ひの、^{アシテ}わらん。

敵境ホウカ一たる物語ふくしよ わき
物語あるば、げ高聖の因ウケみを叶ハタふまド、
人ヒトとらめキムぬかは小コトト出ハシ、
是シテも剣道ヤマあるは修ツが、人ヒトを殺スルてば、
山ヤマはある成シテぬれとほはるや、人ヒトをも
見ミひひとりハ又ハは諸城ニシキ清津キラの地ジよ入リ、

定シテれる高聖カウセイの山ヤマを、ゆりやよせ涉ハシ、
義ヨシんぬニシキ未タタキ、 入ハシくる高聖カウセイ
の山ヤマと、言ハシのむき耳アリよとばかり
あふ入ハシまると、入ハシよふふふも高聖カウセイ
比ハシまで、入ハシまると、車カマハ、車カマをく
将シマを詫ハシマん去ハシマかく世セを遺ハシマ

身を捨て、高野より来るが爲めあり
也。樹れとふ人をも爲めと我と
生身を捨て、いや弱るも爲めも捨
人なれば出家せば仕事さんるが爲め身
を捨てありたり。左捨て出家せらま
なくば、のとて極あがへざるをぞ。いや

法も改ぬてそ、般心勅縁の形なき
般般に勅縁の形あるば、人化不二の道も
走まりや。事彰き経哉、亦も大師
比津身、肉身三昧、目あこうり、是げく
も人佛不二、あふ殊勝なり、實も
大師ハ生みあぐ生死涅槃す。

入定れも高祖の奥カタマリ 今げ山より月の下アカリ
二入アツメテ者ヒトよのあんあうをさづくり、慈愛シエイ乃ハ
薩ササ 壇ダム 因ウツ 明アキラ
下生シタナシを待マチ候マツルふるす人ヒト不ハ二の妙解ミヤクあり
里アシ大師オウジの術ハセふ、慈愛シエイ三ミ会エイ比ヒ曉アサヒあり三ミ罰トドケ
世セ乃ハ尊スル君ヒトと爲スル、ば高祖カオウジ山サンより
上アベクリ 挣ツバキば高祖カオウジ山サンとすハ、高城タカスを志スル二百

里アシ四里ヨリを駆マハまく、本ハタチ上アベ走マハるふ
末ハシモ世セ比ヒ隱ヒカル術ハセとトて、結果ハシモ清淨セイジン乃ハ石場シロガニ
たりタリ、日ヒ中カタマリもほこ祐スルれね、大國オオクニ二ニ年の
四海シバイ窮カタマリ矣マリに、我ワタシは依然カタマリ空スカイの地ジ乃ハ志スル
一ヒにあまアマとトまれマリとトて、三ミ祐スルを投スルせ、落スル
ひヒより光ヒカリとトみミめメあり、けねケネらえラエぞ稍ハタチ

やまとある。されば諸事此中より是く
ねよどぬるを御子代万代のまゝあて、
久しくれとの西方便參へて回記は於
きよりかヤさればよや生の如平等の松風、
も八葉松等を蘇小喰渡り法性院縁
乃月の朝もハ七晩に墨すばして誠よ三

、心の曉を彷彿く也。起き六昂身成仏の一
相成歌入室地浅ゆつてあんく
たる奥の院。古山爲乃あうさびて、能む
能葉せ風風を妄常。報急せ難ひ是
邊も又古往の皆全佛乃縁えの相成
か。然ふ上就れ時禱り事もや
ヤラ

日、
四季す折々のものづくし。先詮情へ。時人
をまよはるや。また能群集の玄が腹うる
高野の山源を。若嶺比風。常樂乃夏
さあ法乃猿名めもんの。乞耳。よりみ
ちくて唱へを。あふゆ。法れ。あう。高野
は。静なあ。是地あり。爲こ。

とて高野の奥北高祖山。時にもまかねや
して六月十一日。二三。てんやう。あん。幻葉さ
ん。がう院より。と。山源。あす。高野院
あれより。も。見。よ。まも。い。つ。も。常盤の。二
皆の。ね。院。よ。う。する。ま。北。風。狩。と。る。物
狩。ひ。あ。されや。下。高祖の。内。よ。て。か。

主あるまじ浦、庶民てハ臣君を仰ぐり、此地をば
る。身も、あてこそゆへ候の連正は、右連
れゆくぬそトヨシミニニシウ、トヨシミニニシウ、トヨシミニニシウ
上也。此地をぬそゆへ、
あすきのきわんが、ぬくおどの畠をい
づくそ、トヨシミニニシウ、トヨシミニニシウ、トヨシミニニシウ
た隣の園をくさむ里、父の
名字トヨシミニニシウ、トヨシミニニシウ、トヨシミニニシウ
平松の仲を系、おとの名をば

言乃比四郎 わきも誠り ほんじ上三世
 乃実朽せずハ是と爲紀のもや、高祖の山
 お新松むるも小をそ嫌しませゆより誠
 の粗氣あらば、主君のあられば、おて警押
 切て、濃墨達す身をやつし、主君と同ド、
 指人の仕事中志実主役北乃とう也

有所權在著

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

定價金五拾錢

著作者 寶生 新

東京市下谷區上根岸町八十六番地

發行兼印制者 江島伊兵衛

發行所 下林寶生流譜本刊行會

終

